

李退溪思想と理想的な指導者像

庵 錫仁（倫理研究所客員研究員）

はじめに

本稿では、朝鮮時代のもっとも傑出した儒学者の一人である李退溪（滉、一五〇一～一五七〇）の思想に光を当てて、彼の思想が追求した理想的な指導者像をスケッチしてみたい。

近頃、書店に行くと「指導者」または「リーダーシップ⁽¹⁾」といった題目がつけられている数多くの本を見ることができる。内容としては、指導者やリーダーシップとは何かを原論的に追求し説明しているもの、歴史的人物に焦点を合わせて具体的な指導者像を紹介しているもの、ある集団のなかで成功する指導者となるための要件を提示しているもの、または政治的なリーダーシップから会社経営のリーダーシップ、スポーツチームや家族のような小集団のリーダーシップを紹介しているもの等々があり、まさに多様な主題や目的で書かれた本と出会うことができる。

こうした書籍がたくさん出版されている背景には、価値観の多様化と混乱のなかに秩序と安定を希求する人々の願いがあり、分化された小集団のなかで成功を収めようとする個々人のニーズでもあるといえよう。あるいは、これは現代社会が理想的な指導者像やリーダーシップを切実に求めているということの一つの証左とみることもできよう。

ところで、問題なのは、多様な議論の数ほど、理想的な指導者像やリーダーシップもさまざまであるということである。時代によって理想的な指導者像やリーダーシップは洋の東・西において異なり、各時代の雰囲気や反映しながら変化してきた。西洋ではプラトンの提示した「哲人王」、マキアベリの「君主」、M・ウェーバーの「ステーツマン」などが代表的な指導者像として挙げられてきた⁽²⁾。また、東洋の伝統社会では、儒教の「聖王」や「君子」、韓非子の法家的な非情の「君主」、または道家でいうような「至人」と「神人」などを挙げることができよう。現代では機能分化された各組織・集団に適した指導者が求められ、指導者像も非常に多様化している。こうした状況で現代社会における理想的なリーダーシップを一般論として描くことはそう簡単ではない。況やすでに過ぎ去った時代のリーダーシップの論理をそのまま現代に当てはめるといふことには無理があるといえよう。しかしながら、あらゆる時代や社会における普遍的な指導者像の抽出は困難であるとしても、現代社会が直面している問題点の解決に有益な示唆を与えてくれる伝統時代の優れたリーダーシップ論を探し出して提示することは可能であり、また意義のある作業となるだろう。

その点において、李退溪思想が示す指導者像・リーダーシップ論は現代人にある確かなメッセージを送っているように思われる。その一端を吟味することが本稿の中心主題となる。論議の展開は、まず東アジア儒学思想史（朱子学）における李退溪思想の特徴を考察し、それに基づいて李退溪の指導者像・リーダーシップを考えてみることにしたい。